

## 辞書史における

## 雅俗語対訳辞書類見出し語の考察

『詞葉新雅』『類聚雅俗言』を資料として

高橋 永行

## 一 はじめに

和英辞典のように現代日本語を外国語に訳す辞書は多くあるが、現代日本語を古語に訳す辞書は、類語辞典の芹生公男(一九九五)『現代語から古語が引ける 古語類語辞典』(三省堂)・第三版(一九九八)以降巻末に「現古辞典」を付録として掲載する北原保雄『全訳古語例解辞典』(小学館)など出版数は少ない。

口語を古語に訳す小辞書は、近世後期に作られはじめた。富士谷御杖『詞葉新雅』(一七九二)・義門『類聚雅俗言』(一八一四)がその代表的な辞書である。また、近代前期にも弾琴緒『俗語雅調』(一八九一)・服部元彦『雅俗俗雅 日本小辞典』(一八九二)などが作られた。多くの辞書類、語彙集が編纂された近世・近代期において見出し語の多くは古語であることから、当時の国語研究における関心の焦点は口語ではなく古語であるといえよう。一方では方言集も多数編まれ、いわゆる話し言葉の記述も行われている。しかし、方言集はあくまでも

地域差を述べるにすぎない。

新井白石は『東雅』(一七一七)にて、

我が國太古の初より、今世に至るまで、五方雅俗の言風と共に移り俗と共に易れるのみにあらず、海外諸國の方言の如きもまた相混じぬと見えたり

と述べ、契沖は『和字正濫通妨抄』(一六九七)にて、

すべて古の人智深く学広ければ、仮名の用やうも末学の思ひよらぬ事おほし

と述べる。これらは国語が時とともに変化したために、古語と口語が意味・用法において一致しなくなつた言語の歴史的事実を的確に指摘したものである。この古語と口語の乖離により、国学を志す初学者にとつて、古語を理解し、使いこなすことは容易なことではなかつた。そのため、国学者は古語と口語を対訳した辞書の編纂を試みるようになる。このような辞書は一般に雅俗語対訳辞書類と称される。初学者が古典研究を学ぶ際の解釈や、歌文創作の一助となすための述作であり、いわゆる学習者向けの「古語辞典」の始まりでもある。古語と口語の対照は、近世中期以降注目された研究方法の一つであった。国学は「書き言葉」重視の傾向があり、言文一致の考え方は近代になつてから西洋文体の影響により生じたもので、古語を「雅」、口語を「俗」と称することからも、古語を規範とする意識が強いことがうかがえる。以上の歴史的事情をふまえて、本稿では近世後期から近代前期の短い期間に試みられた『規範からはずれる』口語を『規範とする』古語に訳す辞書のうち『詞葉新雅』と『類聚雅俗言』を取り上げ、近代国語辞書成立へ続く過渡期に編まれた対訳辞書の編纂方式とりわけ見出

し語の特徴について考察する。

## 二 資料の性格

### 二・一 『詞葉新雅』

小本一冊（「おほむね」三丁、本文一〇六丁）で、門人西村惟俊、藤本正名筆授として、寛政四年皇都（京都）書舗葛西市郎兵衛、同嘉兵衛により出版された。巻首に「初編」とあるが、二編以降は刊行されていない。見返しに、

此書は和歌和文連哥俳諧共に趣向はたちながら詞心のままにい

ひかねたる時その俗語の頭字につきて部分ぶぶんの下を求むへし和歌和

文の詞を委く考てあてたり（傍線部筆者、以下同じ）

とあり、初学者が和歌和文を創作する場合の参考として「俗語」から「和歌和文の詞」を求めるための手引きの役割を担おうとする。つまり、現代の和英辞典と同じ機能を持つ。

「おほむね」に

里言を上とし。古言を下にあてて冊子とす

と述べ、カタカナ表記のことばを見出しに立て、ひらがな表記のことばを対訳する。見返して用いられた「俗語」は里言りごん、「和歌和文の詞」は古言に対応し、それぞれは口語と古語に相当する。「おほむね」および本文以降では口語を里言、古語を古言に統一して使う。採録された見出し語の総数は三一一四である。（注一）

ヌケメナシニ 思ひぐまなく またく

のように複数の古語が対訳された項目や、

クイチガウ たがふ

グレハマニナル 同上

のように、別見出しに送る項目（空見出しに相当する）、

カタミ 里下同

のように口語と同じであると注記する項目も含む。

見出しに立てられたことばは、

アブナイ あやうし

ミノブンザイヲシル 身をしる

のように単語・成句さままでである。

### 二・二 『類聚雅俗言』

小本一冊（「凡例」四丁、俗言索引一丁、本文四十七丁、雅言索引二十六丁）で、凡例末尾に、

文化十一年三月三日脱稿 妙玄寺義門

と署名がある。出版はされず、写本で伝えられた。本稿では『義門研究資料集成下』に収載された三木幸信氏私蔵本を底本とする。『詞葉新雅』と同じく口語を古語に対訳する辞書である。口語を俗言、古語を雅言と称する。

凡例には、

たとへはドクシヤウナといふ俗ごとを、いかで文章に、ものせ  
ましとおもはんをりは、俗言索引につきて、七丁なることをしり  
て、そこをひらきみるべし（傍線部は原文のまま、以下同じ）

と述べられる。俗言索引は、目当ての口語の記載された頁数を示す見出し語の一覧である。凡例には次のように続く。

此むくつけうといへるは俗言に訳さばいかなることにかあらん、此みだりにといふことばはいかが解すべしとやうに、おもへらんにをりは雅言索引につきて、むくつけうなれば十二丁<sup>テモ</sup>みだりにならば二三丁<sup>テモ</sup>にゆきて、その言葉のかたへなる片かなを見て、そのこゑの、俗言索引のかたに、たちかへりて見べし

古語からも口語検索ができるように雅言索引を設け、古語をいらは順に一括して提示し、該当する口語の頭字を右上に小さくカタカナで付けている。

採録された見出し語の総数は一五九九である。ただし、

アツマルヌアツメル つどふ

のように複数の古語が並ぶ項目があり、項目数は一五五六である。

### 三 見出し語の特徴

現在のすべての国語辞典には使用に供するための凡例(手引き)がある。その凡例には当該辞典の特徴が如実に表れる。凡例に示される見出し語についての情報は、ことばをささするためのルールであり、基本として次の三点を取り上げる辞典が多い。

一 示し方(表記文字の種類・仮名遣い)

二 語構成

三 並べ方(配列・親項目と追込項目)

以上について、現代国語辞典と『詞葉新雅』『類聚雅俗言』を比較する。

三・一 示し方

三・一・一 表記文字の種類

現代の国語辞典は、和語・漢語はひらがなで、外来語はカタカナで示すことが多数である。『新潮国語辞典』など、和語はひらがなで、それ以外はカタカナで示す辞典もある。語種の相違に応じてひらがなとカタカナを使い分ける点で共通する。

一方、雅俗語対訳辞書の『詞葉新雅』『類聚雅俗言』は、古語はひらがなで、口語はカタカナで表す。

『詞葉新雅』の「おほむね」には、

古言里言の別は。かんなと片仮名をもてしらす

『類聚雅俗言』の「凡例」には、

かたかなして、かみにあげたるは、さとびこと、ひらがなして、その下に出せるは、そのかたかなしてあげたる俗言にあたりぬべき雅ごと也

と記されている。文体の相違に依じて表記文字の種類を異ならせるといえるが、この特徴は雅俗語対訳辞書類に共通してみられるものである。(注三)

三・一・二 仮名遣い

現代の国語辞典は、見出し語の仮名遣いを原則として「現代仮名遣い」(昭和六十一年七月一日内閣告示第一号)と「外来語の表記」(平成三年六月二十八日内閣告示第二号)に基づき示す。

一方、『詞葉新雅』『類聚雅俗言』は、利用対象者に初学者を想定することから、口語の仮名遣いは当時の規範であった歴史的仮名遣いを

無視して表記する。

『詞葉新雅』の「おほむね」には次のように述べられる。

いとゑ。をとお。えとゑをつつめたるは。今の世。仮名遣にくはしからねは。里言にあたりて古言をもとむるに。まとはせしかため也（中略）里言に。あをやとかき。ふをうとかき。なをのとのせたる所少なからず。ひとへにむけなる人のみやすからむため也

検索の便宜を図り、当時の口語の発音に従って表記する意図が表明される。特に傍線部「あをや」は母音が接続したときに音の連合を起こして別の音に変化する「語連接上の音韻変化現象」のうち、「思索↓シヤン」などの「イアがイヤと変わる音韻添加」をいう。「ふをう」は「八行転呼音」をいう。また「なをの」は「そそのかす↓ソゾナカス」などの母音交替をいう。

『類聚雅俗言』の「凡例」には、次のように述べられる。

さとび言にはチジをわかず、皆チの下に出し、ツズをわかずことごとくツの処に出せり 自慢といふことの如きジの下に出すべけれど、これをチの処に出し 随分をツの下に出せるが如し 又字音のチャウ テウ サウ ソウのたぐひをも、わかず皆まづ出たるこゑのたよりにしたがひて、出し置り、さるはただ、うひまなびの輩のさぐり出むに、すみやかならしめんとして也

『詞葉新雅』と同じく、「出たるこゑのたよりにしたがひて」口語をカタカナで表記することが述べられる。そのため、開合の区別、四つ仮名の区別を無視することが取り上げられている。また、凡例には述べられないが、見出し語には語連接上の音韻変化、合拗音のかき分け

の区別、長音表記ウの脱落などがみられる。(注三)

### 三二二 語構成

現代の国語辞典は、見出し語に「・」を用いて成り立ち上の切れ目を示す（夏・休み）など。活用語（動詞・形容詞など）は原則として終止形で示し、語幹と語尾の間に「・」を入れる（書・く）など。また複合語・慣用句・連語の子見出しは親見出しに追い込み、親見出しに相当する部分を「―」で示す（くるし・い」「―時の神頼み」など）。

一方、『詞葉新雅』『類聚雅俗言』は、語構成についての記号の付与はなく、また活用語は終止形に限らずさまざまな活用形で見出しにする。『類聚雅俗言』の凡例には、

にくし にほはしとやうに切詞のかたにて出すべけれど、にくき にほはしきとやうにつづく詞の方にて出せるあり

と述べられる。語の解釈を主眼とする古語辞典（『倭訓栞』など）は「切詞のかた」（終止形）で見出しを立てることが当時でも一般的であったが、口語を古語に訳すことを目的とする二書は、和歌および文章創作に供するために「つづく詞の方」（連用形など）で見出しを立てることが多い。

### 三二三 並び方

現代の国語辞典は、見出し語の並べ方に原則がある。基本的には見出し語の綴りにより、五〇音順に並べる。清音と濁音および半濁音、直音とそれ以外の音に関しても原則があり、また同音の場合は品詞・

語種・画数による順番が厳密に定められている。この並び方の規則はほとんどの辞典において共通するものである。

一方、『詞葉新雅』『類聚雅俗言』では、見出し語は語頭文字ごとに集められ、イロハ順に並ぶ。<sup>(注四)</sup>ただし第二文字以降の順序・文字数に規則性はない。<sup>(注五)</sup>『類聚雅俗言』は語頭文字の清濁を区別し、部分けする。

広辞苑など現代の国語辞典では、複合語や慣用句・ことわざなどは、語構成上の最初の部分が見出し語として掲げてある場合に、原則としてそれを親項目としてその下にまとめ、追込項目とするのが一般的方針である。

一方、『詞葉新雅』『類聚雅俗言』は第二音節以降の並びに規則性がないため、「親↓追込」の関係にあるとみられる見出し語が語頭文字ごとに集められた語群のどこかにある場合には、利用者が探すという作業をしなければならぬ。

『詞葉新雅』『類聚雅俗言』の見出し語を現代の国語辞典の並び方と同じく五〇音順に並び替えると、親見出しと追込見出しに相当するものがみられる。たとえば『詞葉新雅』では、「隠す」を親見出しとするならば、「隠す」という単語だけの見出しはない)、追込に相当する見出しは次の七語探し当てることができる。

カクサズニ	カクシオホセニクイ	カクシテアル
カクシテキル	カクシテオイテ	カクシテハナシスル
カクシヌク		

複合語の最初の部分に相当する単語ごとにグループ化してみると、

多い順に「何」六〇語、「気」五八語、「心」四四語、「見る」四三語、「手」三六語、「云う」三三語などが挙げられる。

一方『類聚雅俗言』は、同様に「不・無」二五語、「何」二二語、「どう」一九語、「それ」一四語、「一」一四語などが挙げられる。

『詞葉新雅』は追込に相当するグループのうち、語数が十五以上ものは延べ数で六二六語(全見出し語の20%)あるが、『類聚雅俗言』は二以上のものを集めても延べ数で一九〇語(同12%)にすぎず、語の集め方に差がみられる。<sup>(注六)</sup>

#### 四 収められた語の範囲

高橋(二〇〇二)で述べたように、現代の国語辞典、特に小型辞典は、一般社会生活および学習に必要な現代語を中心に約七〜八万語を収録し、中高生以上一般社会人までの利用に供するために編纂される。収められた語の範囲は大槻文彦が『言海』編纂の折に試みた「普通語」に相当する一般語が大部分を占める。

現代の国語辞典の見出し語は、体系としての語彙ではなく、任意に集められた集合としての語彙である。集合としての語彙集としては、『物類称呼』(二七七五)などの方言集や節用集がその典型といえよう。これらの辞書にみられる分類体は、意味分野ごとに語を集めるが、語相互に意味の関連はないので、体系としての利用はできない。まして、イロハ順、五〇音順に見出し語を配列する辞書は、なおさら個々の語が切り離されてしまう。『詞葉新雅』『類聚雅俗言』の見出し語も、著者が独自に採録基準を設定し、一冊にまとめあげた集合としての語彙

である。

語の採録状況は、現代の国語辞典と次の点で大きく異なる。

I 現代の国語辞典は、一般語を見出しに立てるので、どの国語辞典を検索しても目当ての語を探し出せるが、雅俗語対訳辞書は、各辞書ごとに見出し語を比較した場合、重複して立てられることが少ない。もちろん、見出し語数が少ないことも一因である。

II 現代国語辞典の見出し語は、体の類(名詞)が大部分を占めているが、雅俗語対訳辞書は、用・相の類が大部分を占める。以上の二点について特色を述べる。

四・一 見出し語の比較

『詞葉新雅』、『類聚雅俗言』二資料の、ア行の文字を語頭にもつ口語を標本とし、見出し語異同の比較を行う。三二で述べたように、口語表記の規範が定められていないので、仮名遣いや清濁の相違は考慮しない。

ア行の文字を語頭にもつ見出し語の数は、『詞葉新雅』が五二二、『類

(六)

聚雅俗言』が二六五であるが、同一語形の見出し語は三七で、後に成立した『類聚雅俗言』の見出し語の14%にすぎない。また三二で述べたように、活用語は「つづく詞の方」で立てるため、語形を「切詞のかた」に改めたうえで比較することも必要である。語形を終止形にするとほぼ同じになる見出し語は三二である。これらを併せて六八語で、『類聚雅俗言』の見出し語の26%である。六八語中、解説(対訳部)も同じ項目は九語で、残り五九語は対訳される古語や注釈が異なる。見出し語が同じで解説が異なる項目の用例を【表一】に示す。

用例(1)は、御杖の古語訳(いとまなし)に対して義門が批判的態度(イトマナシノ義ニ非ズ)を表すものといえる。用例(2)も直接の言及はないが、同様のものと考えられる。「イッパイニナル」に対して御杖は「みつる」を当てるが、義門は「みつ」を当てる。さらに三二で述べたように、追込見出しに相当する「イッパイニスル」を別に立て、「みつる」を対訳し、「みつトみつるト自然言使然言ノ別アリ」という注釈を加えている。この二例は、先に成立した『詞葉新雅』を参照し

【表一】見出し語が同一の項目 ( ) 内は割注

『詞葉新雅』		『類聚雅俗言』	
見出し	解説	見出し	解説
(1) イソガシイ	いとなし ひまなし いとまなし	イソガシイ	事しげき又いとなし(イトマナシノ義ニ非ズ セワシナイナド云意ナリ)
(2) イッパイニナル	みつる	イッパイニナル	みつ
(3) アブセル	さといかくる(源續二番炬ヲ人ニ打カクルニイヘリ)	アブセル	(湯水ヲ)あむす
(4) オシツヨウ	ひたふるに	オシツヨウ	おもなく(ヌスメルココロノ)しひて

たうえでその誤りを正す態度を示そうとするものであろう。

用例(3)と(4)は古語の意味に異なるものである。(3)は『詞葉新雅』では「灰を浴びせる」の意であるが、『類聚雅俗言』では「入浴」の意で用いられる。また(4)は「ひたむきに、いちずに」に対して「度が過ぎてあつかましい」の意で用いられる。

このように、『類聚雅俗言』には『詞葉新雅』との重複を極力避け、重複するものは『詞葉新雅』の誤りを正すか、別の意味を提示する姿勢がみられる。意味・用法の解説に差が出るのは、現代国語辞典の編集態度と同様に先行辞書との同じ表現を避けるためとも考えられる。

また、『詞葉新雅』の古語は和歌に用いる語を中心としており、『類聚雅俗言』は雅文創作の語を中心としているという性格の相違が対訳部に反映していることも理由のひとつであろう。

『類聚雅俗言』の雅俗語対訳方式は『詞葉新雅』の方式を踏襲しているが、見出しの重複は26%程度しかないことから、先行辞書の補遺となる一面を有しているとみてよい。このような傾向は二つの本資料に限らない。古語を見出しに立てる『雅語訳解』(一八二二)、『園圃拔菜』(一八四五)、『古言訳解』(一八五二)においても見出し語の重複は少ない。

#### 四.二. 見出し語の内訳

ここでは、見出し語の品詞に注目して雅俗語対訳辞書の特徴について述べる。

『分類語彙表』の基準に従い、体(名詞)・用(動詞)・相(形容詞、形容動詞、副詞、感動詞など)の三類に分ける。語句(連文節構成)

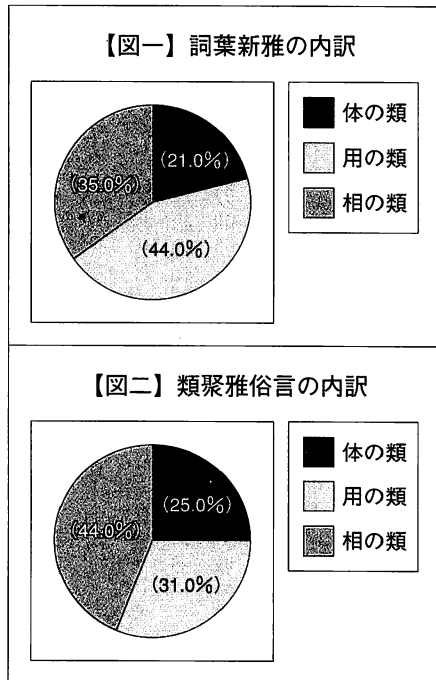
見出しの場合は、被修飾語の品詞により分類する。

例 ワケモノイコト…名詞↓体

フットハルカニ見ヤル…動詞↓用

モヲスモ恐れ多イ…形容詞↓相

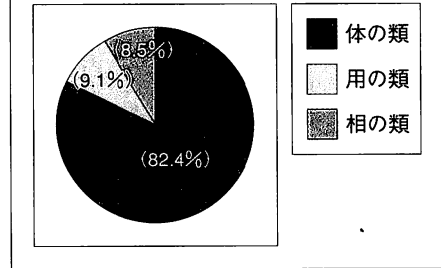
建部一男(一九六四)は、右の方法により『詞葉新雅』の見出し語を分類し、集計した数値を報告している。その結果と『類聚雅俗言』の集計を【図一】、【図二】により比較する。



見出し語の内訳は、二書ともにはほぼ同程度の比率である。中でも体の類が最も少ない。例に挙げたように「イコト」という形式名詞も含むので、実質的な名詞の比率はさらに低くなる。

現代の国語辞典では『新選国語辞典八版』(小学館)の巻末見返しに語の内訳が示されている。詳細に品詞分類されて数値を示しているが、図一・二と比較するために体・用・相の三類にまとめ集計したものを【図

【図三】新選国語辞典八版の内訳



三)に示す。

一般的な国語辞典においては体の類の占める比率が80%を越え、雅俗語対訳辞書類とは大きな相違がみられる。また、中野洋(一九八一)は『分類語彙表』の三万六千二百六十三語の品詞分類を行っている。それによると、体の類が73%を占める。国語辞典・語彙集以外の資料では、宮嶋達夫(一九七七)が一九五六年度の雑誌九〇種の語彙調査を行った。

出現頻度の高い九千語を標本として同様の集計を示すところによると、雑誌の文章においても体の類が59%を占めるといふ。つまり『詞葉新雅』の21%、『類聚雅俗言』の25%という数値は「辞書」という書物の特徴からみても、また実際に書かれる文章の実態からみても、極端に低いといえる。ここには編者の恣意的な方針がある。鈴木胤は『雅語訳解』凡例において、次のように記す。

此書活語を多く載せて、名目の語をば多くは省けるは、名目の語は、注釈をだに見ば、よくしられて紛るる事もなかるべけれど、活語のころばえは紛らはしくて、新に訳解を加へざれば、細かには暁りがたき故なり、すべて耳ちかき詞のしりやすきは、大方もらしつ

活語(用・相の類)は意味が紛らわしく、新たに訳解を加えないと細かには解りがたいが、名目の語(体の類)は他の文献の注釈を参考

にすればよく解るといふ理由から、名目の語を多く立てなかつたといふのである。また萩原広道は『古言訳解』凡例において、収載語は「用語」を中心に集め、「体言・物名」は「古言梯・倭訓菜・和名抄・本草和名」を参考にせよと述べる。『雅語訳解』の「注釈」はこれら中近世期の語義辞典を指すと思われる。

雅俗語対訳辞書の著者は、体の類よりも用・相の類に注目する。辞典の利用者が何を目的として手にするかということに関して、現代国語辞典は語義を調べることを想定しているのに対し、雅俗語対訳辞書は和歌和文の創作や読解をする場合に、雅語を実例に則してどのように運用するかという表現の仕方を調べることを想定している。この相違により、収められた語の範囲に独自の特色がみられる。

近代の普通語辞書以前のもは、使用目的に応じて収める語の範囲を限定するという『辞書の専門化』が行われていた。<sup>(注七)</sup>この傾向は近代に入っても続き、用言だけを六千語集めた物集高見『日本小辞典』(一八七八)は『辞書の専門化』に特化した典型といえる。

### 五 意味・用法(大分類、小分類)

『詞葉新雅』は、見出し語に対して複数の古語を訳す項目が多数あるが、それは類語を並べるもので、意味区分を設定しない。つまり、見出し語と意味・用法の解説は一对一の対応である。しかし、『類聚雅俗言』は、ひとつの見出し語に意味区分を設定する項目がいくつもある。

- (5) アナタ(向ヘル上ラウヤマイテイフ) おまへ(又彼方ノ) あなた  
 (6) ボク(僕 やつこ) (下ヘヲ云 自ら指テ僕ト云意ハわれト云ベシ) やつ



がれト云ハ誤ナリ)

(7) センサクスル(吟味スト云ニ通ハ) たづぬる又考る(又、イツハイカガト前日ニ評議スルヲ云ハ) あらましごとといふ(又、ムツカシウ念ヲイレルト云心ノハ) あなぐる

(8) ホル(兼ルヲ云ハ) ほほかす(又土などを 穿ハ) ほる

(5) (8)は、同訓異字・同音異義を示す。異なる意味をもつ古語を意味区分し、対訳する項目である。

また言語運用を示す解説もみられる。

(9) ヤカマシイ かまびすし又、かしがまし(又、人ニ向テ制スルノ意ノハ) あなかま(ヤイヤカマシイダマレト云意ニテタダヤカマシイト云ト少異ナリ)

(10) リツパナ けざやか又、めでたき(道具ナドケツコヲナド云ニカヨウ又) うつくしき(カホカタチナド 又) つやつやしき又、花やかなる(人ニテモ物ニテモ花麗ナルナリ 又) はえはえしき(花ナド又) あてなる(貴人ナド 又) めもあやなり(殿ツクリ 衣服 海 山ナド又) つきつきし(ソレ相応デト云ニ近シ 又) つややかなる(ヒカリアルサマノモノニ猶リツパト云ニアタル雅語アルベシ 文ノ前後ノサマニヨリテ用フベシ 己上ノモカク必分ルト云ニハアラズ タダ大カタヲ云ルノミナリ ナツムベカラズ)

(9)は、異なる品詞を扱い、形容詞で用いる場合と感動詞で用いる場合とで意味に相違があることを注記するものである。(10)は、形容する対象により古語では異なる語を使うことを示すもので、現代の国語辞典の囲み記事などに相当する詳細な注記が特徴である。いずれも実際の文章表現時に即した使い分けを示したものといえる。

一つの見出し語に対して意味区分を設ける方式は、『雅語訳解』にも二例みられる。(□は原文のまま。)

(11) ほと (相撲の) **セキトリ** なり、最手の意也、又 **帆綱** (

(12) **しのぶ** **カクス** **カクレル** **コラヘル**

(又**思ヒダス** **コヒシガル** **シタフ** 此二つは、本より別々のことば也)

一つの見出し語のもとに意味区分を解説する方式は、意味が二つ以上ある場合と、意味が二つ以上に分かれる場合とで厳密には記述の仕方に相違があるが、現代国語辞典の一般的なルールである。『類聚雅俗言』や『雅語訳解』の用例(5) (12)は、近代国語辞書の特徴に通ずるものといえる。

## 六 むすび く文法論と辞書編集く

これまで、見出し語に焦点を当てて雅俗語対訳辞書類の特色をみてきた。辞書の編集は国学者にとつてみれば、「副業」に近いものである。御杖、義門は文法学者として名高い業績を残している。彼らの文法論は辞書に取り入れられているのだろうか。二資料にみられる文法に関する記述を次に挙げる。

御杖は解説で一カ所だけ文法用語を使用している。

(13) サテモ さも も **アユヒ**也

(13)の「アユヒ」は富士谷学派では「**脚結**」であり、助詞・助動詞などの付属語を表す。見出し語「**さても**」に対して対訳する古語が助詞「も」であることを注記したものである。口語に品詞の異なる古語を

当てたため利用者に注意をうながそうとしたのであろう。

一方、義門は三・二でふれたように、見出し語の語形を「切詞のかた」ではなく、「つづく詞の方」で出し、示し方を文法論から定義する。(注八)また、四・一の(2)「イツバイニナル」のほかに、自動詞(自然言)と他動詞(使然言)の説明をする項目がある。

(14) コサセル こす(コスハコエシムルナリ コユハ自ラコユルナリ 自然ノ詞 コスハ使然ノ詞ナリ)

現代の国語辞典では動詞を見出しに立てる場合、自動詞・他動詞・補助動詞の区別を示すのに通ずる。なお服の『雅語訳解』においても自動詞・他動詞の区別を明記する項目は二例みられる。(注九)活用のあるさまに関する記述は七例ある。ここでは(15)〜(17)の三例を挙げる。

(15) シタガヘル したがふる(したがへむナドハタラク)したがふ(したがむ)したがひトハタラク)

(16) シヨゾクスル さうぞく(さうぞかむ そうぞきてト活ク詞 字音ヲハタラカセタル詞ナリ)

(17) ブサホヲナヌブシツケ なめきふるまひ(なめきハなめく なめしトハタラク 近世ノ人コノ詞ヲアヤマラヌハナシ ミナ なめしき なめしクトツカフ 非ナリ)

全例「くトハタラク」と説明し、活用つまり文章を書くときの語形変化を具体的に例示する。(17)は間違いやすい古語の活用についての注意が述べられる。これは活用研究に多大な業績を残す義門の語学研究の現れである。この方針は、『新選国語辞典』などが活用する語については見出し語の下に品詞・活用の種類・活用語尾を掲げる表し方をす

ることに通じる。(16)はサ変動詞についての解説である。現代の国語辞典では、サ変動詞の場合には語幹となる語を見出しとし、その品詞を示して注記の形で「するがついてサ変動詞となる」ことを示す方式が一般的である。しかし、義門はスルがついた語形をそのまま見出しに立て、解説で注記する方式をとっている。『類聚雅俗言』では品詞論についての言及は行わないため品詞を明示しないので、「字音ヲハタラカセタル詞」と解説し、他の動詞と性格が異なることを取り上げたのであろう。

文法論に基づいて辞書の編纂を行うのは、近代の官撰国語辞書『語彙』(二八七〜八四)以降のことで、近代国語辞書の特色である。しかし、雅俗語対訳辞書類には、辞書に文法的要素を取り入れることの萌芽がみられる。もちろん、見出し語が切れ続きの形(特に連用形)であることや、解説で用法についてふれることをいくつか拾い出せるだけであつて、御杖や義門、服それぞれの文法論の展開をふまえたものではない。

資料からは、規範外の口語を辞書の見出しにたてることの苦勞が読み取れる。雅俗語対訳辞書は辞書としては試作品であつた。辞典の典は規範を意味し、辞典と称する辞書は近代になつてから現れる。しかし、御杖、義門をはじめ国学者たちの取り組みは近代以降の国語辞典に生かされている。辞書史上だけではなく国語学史上においても貴重な資料といえる。

参考文献

- 福島邦道(一九六九)「雅俗語対訳辞書の発達」(『実践女子大学文学部紀要』12)
- 佐藤 茂(一九五六)「詞葉新雅の意義」(『福井大学学芸学部紀要』人文科学』五)
- 建部一男(一九六四)「詞葉新雅」における里言と雅言」(『論究日本文学』一 立命館大学日本文学部編)
- 中村幸彦(一九六四)「近世語資料としての詞葉新雅」(『語文研究』十八 九州大学文学部国語学国文学研究室)
- 中野 洋(一九八一)「分類語彙表」の語数」(『計量国語学』十二卷八号)
- 宮嶋達夫(一九七七)「語彙の体系」(『岩波講座・日本語』九)
- 湯浅茂雄(一九八八)「雅俗語対訳辞書の俗語の性格」鈴木胤「雅語訳解」を資料として」(『国語語彙史の研究』九 和泉書院)
- 湯浅茂雄(一九九一)「雅俗対訳資料と語彙研究」『雅語訳解』『古言訳解』を資料として」(『日本近代語研究』一 ひつじ書房)
- 高橋永行(一九九二)「義門『類聚雅俗言』にみる近世俗語語彙」(『都大論究』29)
- 高橋永行(一九九七)「近代国語辞書」『義門』鈴木胤」(『日本語学キーワード事典』朝倉書店)
- 高橋永行(二〇〇二)「国語辞書の現状と教育」(『人・ことば・文学』菊地靖彦教授追悼論集刊行会)

注

- (注一)「モチマヘノクセ さが」が重出するため、佐藤茂氏は三一・三二と数える。
- (注二)近代の辞書のひとつである弾琴緒『俗語雅調』(二八九一)は「歌詞八平仮字、文詞八片仮字」で表記する。
- (注三)二資料にみられる実際の用例については高橋(一九九二)参照。
- (注四)雅俗語対訳辞書類における五〇音順配列の初出は足代弘訓『詞のしき浪』(一八四一)。
- (注五)『類聚雅俗言』の雅言索引は、第二文字までイロハ順に配列される。
- (注六)現代の国語辞典の多くは、漢字一文字を当てるもので見出しとなる仮名の文字数が少ない語(三字以内など)に、他の語が結合した複合語(「心」に対する「心あたり」など)は、検索の便のために独立見出しとする。そのため、厳密には例示したすべての語が親見出しに相当するわけではないが、雅俗語対訳辞書の見出し語の特徴のひとつとして示した。
- (注七)高橋(一九九七)参照。
- (注八)胤も『雅語訳解』凡例で次のように述べる。  
詞を標するには、すわりたる本語をしるべき事なれど、訳の語勢あひがたき故に、尽くはきは得ならず、いの部に、いはけてと<sup>レ</sup>して、いはくとはあ<sup>レ</sup>げざるが如し
- (注九)次の二例である。  
こす(コサセル) こすはこえしむなり こゆは自然の詞、こすは使然の詞なり  
り(つどう(アツメル) アツマル)